インドネシア共和国　　派遣期間　２０１３年４月～２０１６年３月

スラバヤ日本人学校　帰国報告

岩内町立岩内第二中学校
教諭　　笠　原　雄　哉

１．インドネシア共和国とスラバヤ市

（１）インドネシア共和国

基本データ
・首都：ジャカルタ　　・人口：約２億５千万人
・通貨：インドネシア・ルピア（Rp.10,000 ≒ 87 円：2016 年３月現在）
・政治体制：共和制（大統領の任期は５年。最長で二期まで）　　・国家元首：ジョコ・ウィドド大統領
・宗教：イスラム教が９割（他にヒンドゥ教、キリスト教　など）

２００年近くのオランダ支配、第二次世界大戦中は日本の軍政下におかれ、１９４５年に独立を宣言したインドネシア共和国。現在では約２億５千万の人々が、東西約 5,000 ㎞に１万３千以上ある島々に暮らしている。その多くは、首都ジャカルタがあるジャワ島、マレー半島に平行するスマトラ島に住んでいる。

インドネシアの地形の特色として、「アルプス・ヒマラヤ造山帯」の東端に位置するため、火山噴火や地震も多い。２００４年に発生した「インド洋大津波」の際の巨大地震は、スマトラ島北部の沖合で発生している。

（２）スラバヤ市

人口約３００万人が暮らすスラバヤ市は、東ジャワ州の州都であると同時に、インドネシア第２の都市でもある。ジャワ語の「スロ＝鮫」と「ボヨ＝鰐」が由来で、街の中心部などにいくと、鮫と鰐のモニュメントが飾られている。

歴史的に見てみると、13 世紀後半には、インドネシアに攻撃を加えた元軍を追い出すための戦いが始まったのが、ここスラバヤで、その戦いをもって、「スラバヤ市の誕生」とされている。また、第二次世界大戦終結後の、オランダからの独立戦争も、戦いが始まったのは、スラバヤ市である。

以前から多くいた華人に加え、最近ではインド人やアラブ人、欧米系の人々の姿も多く見られる。また、郊外には日系企業の工場などが集まる工業団地も建設され、商業都市としての発展も著しい。

スラバヤ・モニュメント

（３）インドネシアの教育制度

インドネシアの学校教育は、SD(小学校)６年間、SMP(中学校)３年間の義務教育と、SMA、SMK(高等学校)の３年間、UNIVERSITAS(大学)の４年間というふうに、日本と同じである。ただ、違いとしては各学年に進級テストがあるということだ。つまり、進級テストをパスできなければ、小学１年生を続けて…ということもあり得る。

なお、高等学校の SMA と SMK は、前者が日本でいう「普通科高校」。後者が「職業科高校」を意味している。どちらの種類の高等学校からも、就職・進学は可能。ただし、高校卒業後すぐに就職した場

合、SMA よりも SMK の方が「即戦力」とみなされ、給料が高く設定されている。

交流校訪問の様子

インドネシアでは、新学期は 7 月後半から 8 月前半にかけて始まる。日本で言う「入学式」のようなものは存在せず、簡単な担任紹介などの後、すぐに授業が始まる。

小・中・高を問わず、学校の前には、軽食の屋台が立ち並び、休み時間や下校時に買い食いする子どもたちの姿も多く見られる。具体的には、どの校種も朝 7:00 ころに授業が始まり、SD（小学校）では 12:00 ころ、SMP（中学校）では 13:00 ころ、SMA（高校）では 14:00 ころに放下になる。日本のような給食はもちろんない。また、金曜日はイスラムの礼拝のために午前で終わる学校がほとんどである。

３．スラバヤ日本人学校の教育

学校教育目標

豊かな人間性と国際感覚を身につけた　心身ともに健康なスラバヤっ子の育成

・仲間を大切にする子（Sehabat Yang Berharga）　・一生懸命学ぶ子（Rajin Belajar）

・健康で元気な子（Berbadan Sehat）

・誰とでも仲良くできる子（Yang Selalu Rukun Dengan Sesama）

（１）スラバヤ日本人学校の１日の流れ

①概要

スラバヤ日本人学校（以下：SJS）は、小学部５７名、中学部８名の、全校児童生徒数６５名（平成２８年２月現在）の小中併設校である。小学部の担任をもちながら中学部の授業へ行ったり、中学部の担任でありながら小学部の授業へ行ったりということも当たり前に行われている。なお、笠原は中学部の担任をしながら、小学部社会、中学社会、中学技術、中学国語の教科を担当していた。

②登校と朝の時間

ＳＪＳのタイムスケジュールは，右のとおり。ノーチャイムで一日を過ごし，時間を意識した生活を送ることができるよう指導している。

児童生徒は朝の７時から７時半までに各家庭の自家用車で登校する。月曜日には朝会があり，他の曜日は，朝の会や朝学習などをしている。

内　容	小学部	中学部
朝の会	7:30～ 7:40	7:20～7:40（朝学習） 7:40～ 7:45 （朝の会）
朝の学習	7:40～7:50	
準備	7:50～ 7:55	7:45～ 7:50
1校時	7:55～8:40	7:50～8:40
準備	8:40～ 8:50	8:40～ 8:50
2校時	8:50～9:35	8:50～9:40
準備	9:35～ 9:40	
業　間	9:40～9:55	9:40～9:55
準備	9:55～10:00	
3校時	10:00～10:45	9:55～10:45
準備	10:45～10:55	10:45～10:55
4校時	10:55～11:40	10:55～11:45
準備	11:40～11:45	11:45～11:50
昼食・休憩	11:45～12:35	11:50～12:35
掃　除	12:40～12:55	
準備	12:55～13:05	12:55～13:00
5校時	13:05～13:50	13:00～13:50 (12:40～13:30)
準備	13:50～14:00	13:50～14:00
6校時	14:00～14:45	14:00～14:50 (13:40～14:30)
準備		
帰りの会	14:45～14:55	14:50～15:00
7校時		15:00～15:50
最終下校時間	16:00(水曜日のみ15:00or15:30)	

スラバヤ日本人学校　日課表（2016 年度）

③業間

２校時と３校時の間に15分間の業間がある。児童生徒は授業の準備をしたり，体育館や運動場で遊んだりして過ごす。この時間を利用して，小学部は，毎週火曜日に２０分間の業間運動（１学期：持久走，２学期：一輪車，3学期：なわとび）を行い，自分の目標に向けて体力作りをしている。

また，金曜日は読書の時間としています。中学部の体力作りは業間ではなく，放課後運動の時間（１学期：持久走，２学期：バスケットボール，3学期：ソフトバレーボール）として設定されている。

中学部放課後運動

④昼食

昼食は教職員・児童生徒ともに弁当を持参する。登校後すぐに各学年の当番が児童生徒全員分の弁当を職員室に届ける。これは弁当を腐らせないようにするためである。そして，４時間目終了後に各教室で先生と児童生徒が一緒に昼食をとる。水道の水は飲めないので各自水筒を持参している。食後は歯磨きを行い、歯磨き用の水は，ミネラルウォーターを使用する。

⑤清掃活動

昼休みの後，全校一斉に清掃を行う。人数が少ないため普段は自分の教室のみを清掃し，週１回，縦割り班で特別教室の清掃を行っている。

⑥放課後の活動や下校

放課後は水曜日を除いて校庭が開放されており，児童生徒は校庭や体育館，中庭や図書室などで活動している。学年による違いはあるが，小学部は通常６校時まで授業があり，中学部は月曜日が７校時，他の曜日は６校時まで授業をおこなっている。

（２）特色ある取り組み

小・中学部ともに２０２日の授業日数を確保し、余裕のある授業日数で、多彩な行事に取り組んでいる。中からいくつか紹介する。

①検定の取得をサポート

英語検定(２回)、漢字検定(２回)、数学検定(２回)を学校で受検することができる(受検は任意、回数は２０１５年度実施回数)。また、検定取得に向けて朝学習や授業、放課後を利用してサポートしている。

②高校(中学)受験に向けて

小規模校の特性を活かし、個々に応じて受験に向けてサポート。

・土日に校外模試を実施(任意受験)、日本の児童生徒との学習成果の比較が可能。
　小学部３回(７月、１１月、２月)　TK 到達度確認テスト
　中学部５回(５月、７月、９月、１１月、２月)　統一模試
・朝学習、放課後の時間を利用しての補習授業を実施
・個別での面接練習

③わくわくサマースクール

１学期終了後の３日間、任意参加のサマースクール(補習教室)を行っている。

・小学部…１学期の復習や、専任の教師による特別講座

実施例）体育「かけっこ塾」 社会「インターネットで調べてみよう」 理科「よく飛ぶ紙飛行機」

・中学部…１学期の復習を中心に、２学期の先取りや、一部の分野に特化しての演習問題(入試問題に挑戦)

④年間を通しての水泳授業

常夏の気候を活かして、約２週間に１回(２時間)水泳授業を行っている。習熟度別に分けて授業を行い、授業の最後には検定を実施。検定合格者は次回、上の級へ上がることができる。スイミングスクールに通わなくても、１年を終える頃にはほとんどの児童生徒がヘルパーなしで泳げるようになっている。１１月には水泳記録会があり、学年の垣根を越えてタイムを競う。学校敷地内にはプールがないため、校外の施設を利用している。

水泳記録会

⑤委員会活動（交流委員会・インドネシア語講座）

インドネシア語の向上を図るために、交流委員会が毎月第３月曜日の朝に「インドネシア語講座」を開催。事前に、各月ごとにテーマを決め、それに関連する単語や文章をプリントにまとめ、全校児童生徒と先生方に配布。講座の日は、プリントに載っていた単語や文章を発音したり、クイズや劇を通してより理解を深めたりしている。毎回、いろいろな工夫があり、子どもたちもこの日を楽しみにしている。

交流委員会朝会でのレク

⑥インドネシア語会話

一年間に２５回、日本語の話せるインドネシア人講師からインドネシア語会話の授業を実施。小学部１・２年生はクラス全員で歌やゲームなどを通して楽しみながら学んでいる。小学部３年生以上は、学年を解体し学習習熟度別に１級から６級までに分かれ、言語を通して文化や風習などを学んでいる。

講師の多くは、高校で日本語を教えていた経験を持つ方々なので、言語面だけでなく教育法にも精通している。毎学期ごとに担当教諭と講師で級を見直し、上達すれば進級できる仕組みが学習意欲につながっている。

インドネシア語会話の授業

⑧国際文化交流

日本の学校で言う「学習発表会」や「学芸会」と同じような行事である。小学部１・２年、３・４年、５・６年、中学部と４つのグループに分かれて舞台発表を行います。毎年、交流校の児童生徒と一緒に舞台に立ち、演奏や劇、踊りをおこなう。交流校の児童生徒との練習を通して絆が一段と深まっている。また、交流校からの演目もあり、美しい民族衣装を着てインドネシアの伝統的な踊りや歌などを披露していただいている。日本文化とインドネシア文化を子どもたちの目線で捉え、発表を通して文化交流を行い、現地理

平成 25 年度 中学部 阿波踊り

解を進めている。

⑨スラバヤタイム

総合的な学習の時間をＳＪＳではスラバヤタイムと呼んでいる。主に現地理解教育を中心とした活動を、子どもたちの興味関心から組み立て、一年間を通して課題を追求していく。例えば小学部では、町を歩いて探検してみたい、アンクタンコタ(乗り合いミニバス)に乗ってみたい、パサール(市場)に行ってみたいなど、普段の生活では体験できないことを、教員とＳＪＳのスタッフが協力し、安全面を配慮しながら実施している。中学部では、キャリア学習に取り組み、現地の邦人企業の協力の下、職場体験学習を行っている。

例年２月には、スラバヤタイム発表会を開催し、学習の成果を報告している。保護者にも多数参観いただき、学年を超えて共有する機会になっている。

中学部職場体験

⑩交流校招待・交流校訪問

小学部は国立ウネサ小学校、中学部は国立第１３中学校と一年間を通して交流をしています。例年、２学期に SJS へ招待し、日本文化や習慣・風習を伝えたり、共に活動する中から友情を育んだりしています。また、３学期は交流校を訪問し、学校の様子を見学したり、ともに授業を受けたりして、現地と日本の学校の違いを、体験から学んでいる。

国立第１３中学校を訪問

⑪歓迎会・お別れ会

児童生徒は、保護者の仕事の都合に合わせ、３年程度の在学となる場合が多い。そのため、転出入（正式には転入学・退学）が多い。SJS では、転入生がある場合は「歓迎会」、転出生がある場合には「お別れ会」を全校児童生徒が出席する中で行われる。特に「お別れ会」は盛大に行われる。転出生の最終登校日の朝に、全校朝会形式で、校長先生から転出生の紹介と、転出生へのメッセージが紹介された後、学級代表の生徒からのメッセージ、全校児童生徒からの寄せ書き、PTA からの記念品が贈られる。

下校時には、全校児童生徒、全教職員、それに保護者も集まって盛大に見送りが行われる。最後に児童生徒会執行部による、「エール」が送られ、児童生徒同士が、いつかの再会を約束して終わりを迎える。児童生徒たちは級友との別れを惜しみながらも、互いの活躍を期待し合う。この場面は、見ている教員、保護者も涙を流す場面である。

玄関での見送り

３．教育実践の例

ここでは、私が中心となって取り組んだ、平成２６年度中学部自然体験教室、平成２７年度国際文化交流会、そして、中学部３年生を担任した時の取り組みについて簡単に紹介させていただく。

①　平成２６年度中学部自然体験教室での取り組み

新年度が始まってすぐ、同期の中学部教員とＳＪＳのスタッフ２名、私の計４名で、スラバヤからバスで４時間程度の位置にある、ブロモ山の下見を行った。雄大なカルデラ地形と、夜の天体観測を活動の中心にし、活動計画を立て始めた。ところが、火山活動が活発になったことから、ブロモ山周辺５ｋｍ圏内の立ち入りが禁止されたことから、体験教室を１か月後に控えた時期に、再度計画立案ということになってしまった。

インドネシアは熱帯の地域ということもあり、自然は豊かであるが、体験学習をできる施設や、山間部などの宿泊施設は少ない。ある時、当時の校長先生が、「バトゥ市（スラバヤから２時間程度）に、残留日本兵の方がいらっしゃるよ」と教えてくださったことを機に、バトゥ市周辺での自然体験学習と、残留日本兵の方の講話を中心とした研修旅行としての立案を急いだ。

６月におこなった、自然体験学習最終日の３日目。朝からホテルの会議室を借り切り、残留日本兵の方に講話をしていただいた。彼の名は、小野盛（おの　さかり）。小野氏は、大正８年に北海道に生まれ、２０歳の時に出征。２３歳の時サイゴン(現:ホーチミン)、シンガポールを経てインドネシア・ジャワ島に上陸。敗戦後、彼は「インドネシア独立の約束を反故にした日本への義憤」を感じて日本軍を離脱し、オランダからの独立を目指し戦闘を続けていた、インドネシア独立軍の一員として戦闘に加わった。インドネシアの独立後も、日本へ留学するインドネシア人学生を支援する組織をつくるなど、日本とインドネシアの架け橋としての役割を果たした。なお、他の残留日本兵は高齢のために亡くなられており、彼が「最後の残留日本兵」として、現地邦人はもちろん、東ジャワ州に住むインドネシア人にも広く知られている。

生徒たちは、それぞれに「日本に帰らないと決意した時の気持ち」や「戦争についてどう考えているか」、「日本とインドネシアの今後の関係にどのようなことを望むか」などと質問し、その一つひとつに丁寧に答えて下さった。なかでも、「私は決して戦争を望んではいない。戦争なんて無い方がいいに決まっている。でも、私が独立戦争に協力したことが、少しでも今のインドネシアにつながっているのなら本望だ。日本とインドネシアはこれからずっと先の時代も友好関係を保っていかなければならないし、もっともっとお互いを知るべきだ。どうかその架け橋に皆さんがなってください。」というお話がとても印象に残った。生徒たちもこの言葉には感銘を受けたようで、「将来、大学へ行って語学を学んで、インドネシアで働くために戻ってきたい」と話す生徒もいた。

この体験をもとに、平成２６年度の国際文化交流会の中学部の発表では、インドネシア独立に関する朗読劇を行い、現地の中学生とともにインドネシア、日本それぞれの曲を一緒に合唱した。

小野氏による講話の様子

なお、小野氏は直後の平成２６年８月２５日に９４歳で亡くなり、インドネシア国軍による葬儀が行われ、英雄墓地に埋葬された。小野氏には貴重な体験の機会をくださったことに深く感謝するとともに、

あらためてご冥福をお祈りしたい。

② 平成２７年度国際文化交流会での取り組み

例年、各グループが日本またはインドネシアの文化や芸術を題材にした発表を行う国際文化交流会。平成２７年度、中学部では和太鼓の発表を行った。

和太鼓といっても全員で同じリズム、決められたリズムをたたく「揃い打ち」と、一定のリズムに合わせてそれぞれが自由にたたく「回し打ち」がある。私自身、和太鼓経験者ということもあり、生徒たちには「回し打ち」に挑戦させることにした。

平成２７年度国際文化交流会 中学部和太鼓

和太鼓に触れるのは初めてという生徒たち。しかも全員で同じリズムをたたくのではなく、それぞれが創作したリズムをたたく。さらに、そのノウハウを現地校の生徒に教え伝えなければならない。練習開始からの１か月間。生徒たちは本当に苦労したと思う。自分たちが教えるためには、教えることをきちんと知っていなければならない。太鼓のたたき方はもちろん、その歴史なども勉強し、どのように伝えるかを考えた。結果、ＳＪＳの生徒が現地校の生徒にマンツーマンで教えることになった。もともとインドネシアの人々は「ノリ」がよくリズム感覚も素晴らしい。コツさえつかんでしまえば自由にのびのびとたたくことができる。それを見たＳＪＳ生徒は、「負けていられない」とさらに練習を積んでいった。太鼓は交流会本番１週間前まで借りることができず、それまでは、ミネラルウォーターを使用して、空になったガロンを使って練習した。

交流会当日は、ＳＪＳの生徒と現地の交流校の生徒が、息の合った打演を披露し、大成功を収めることができた。交流会後、ＳＪＳの生徒と交流校の生徒が握手する場面も見られた。生徒たちからは「こんなに達成感を感じたことはない」とか「海外という地で、しかも日本人以外の人たちと人と何かをつくりあげる、本当に充実感を得た」などの感想が聞かれた。

③ 受験指導（中学部３年生担任として）

ほとんどの中学部生徒は、日本の高校へ進学する。そのため、仮に父親の現地での任期が残っている場合は、母親とその生徒のみが本帰国することになる。ここ数年、スラバヤ日本人学校では、中学部３年生の初め、または１学期終了と同時に、生徒は母親とともに本帰国し、日本の中学校で高校受験に向けた準備をするケースが多かったようである。実際に私が赴任した１年目は、中３生の在籍は０だった。

中２生７名全員が翌年度（私の任期２年目）も残ることになり、その学年を私が担任することになり、まず取り組んだことは、生徒はもちろん保護者に安心してもらうこと。受験資料や情報を、日本から取り寄せた。また、不安な表情が見られる生徒や保護者には、こちらから積極的に声を掛け、その時々にどのような心配事があるのかを聞き出しケアに努めた。また、それまで以上に行事を充実させることで、日本とは違った環境に身を置きながら、日本以上の教育が受けられることを実感してもらうよう取り組んだ。また放課後の補習も行ったり、土日には図書室を開放したりして「塾が無くて…」という不安や不満を取り除き、学習に集中して取り組めるような環境も整えた。また、早い時期から、面接指導や作文指導を行うことで、推薦受験や帰国子女枠受験を希望する生徒にも対応した。

残念ながら１名の生徒が、父親の仕事の関係で、年度途中に本帰国となってしまったが、残る６名は

卒業までをスラバヤ日本人学校で過ごし、全員が希望する高校に見事合格し、現在では充実した高校生活を送っている。

４．現地での生活とまとめ

スラバヤには現在 800～900 名の日本人が暮らしていると言われる。多くは日系企業の駐在員とその家族である。ただし、ここ最近のイスラム教徒の過激派によるテロ事件が起こる中で、単身赴任する駐在員も増えてきている。多くの企業では、タクシーの利用を禁止していたり、屋台での食事を禁止していたりと、現地で生活する者にとっての制約は多い。実際、SJS では、自家用車の運転が禁止されており、運転手を雇うことが義務づけられていた。私は３年間、自らが雇った運転手と家族ぐるみの付き合いをしてきた。現地に住む日本人社会の中では、運転手やメイドを甘やかせてはいけない、仲良くしてはいけない、といった風潮が根強い。もちろん、雇用主と従業員という関係は保っていたが、現地での生活ということに関しては、彼が大先輩。休日や勤務終了後は、安全に配慮したうえで、穴場のスポットを案内してもらったり、現地の人々がよく行くようなインドネシア料理のお店に連れて行ってもらったりした。私は彼と良好な関係を保ちたいと考えていたので、「嫌なものは嫌」、「ダメなものはダメ」ということをはっきりと伝えるようにしていた。ここまでは多くの人がおこなうことなのだが、私は「なぜ嫌なのか」、「なぜダメなのか」まで伝えていた。我々はあくまでも住ませてもらっている身。我々の常識が通用するはずがない。だから、こちらの意図をできるだけ伝えるようにしていた。

現地のレストランにて

日本では「当たり前」なことが当たり前ではない国、インドネシア。現地のお店などで何かを注文し、約束の時間に行くと、まだできていないということは日常茶飯事。そんな状況に、赴任当時はイライラすることも少なくなかった。ただ、そのような状況に慣れてくると、逆に日本の「時間にきっちりした生活」が息苦しく感じてくるほどである。「住めば都」とはこういうことなのだろうか。しかしながら、日常品の質は決して高くはなく、日本と同じような生活ができないことに苦労している在留邦人は多い。そのような中でも、児童生徒たちは汗だくになりながら毎日元気に学校生活を送っている。少々野暮な表現かもしれないが、自ら海外での勤務を希望し、この地に来たという人や家族はほとんどいない。一方、私たち派遣教員は、赴任地を自ら選ぶことはできないにせよ、自ら志願してやって来た身。少々の不便さがあっても、不平を言わず、気持ちよく職務に臨む気持ちが必要であると思う。私自身、インドネシアという国で自分の好きな仕事をしながら、３年間の生活を送ることができたのは大きな財産になったことは間違いないといえる。